河田　康一　　菊池　弘明　　下山　　孝
松永　藤雄

昨年の本総会において，白鼠における脂酸の吸収動態を，標識オレイン酸，リノール酸，パルミチン酸を用いてえた成績を報告したが，今回は，これらの脂酸に加えて，methyl-γ-linoleate-1-^{14}C (spec. act. 20.0mCi/mM) の主として，吸収，肝内への取り込みについて検討した．

^{14}C 標識 γ-linoleate 0.2ml (0.5μCi) をポリエチレンチューブを使って，白鼠胃内に注入し，注入30分，60分，120分後に心穿刺により屠殺して，吸収率は腸管内 RI 残存率から逆算して求めた．その結果，γ-linoleate は，これまでの実験に用いた脂酸に比べて吸収率が極めてよく，脂酸の吸収は，オレイン酸，リノール酸，リノレイン酸の順で不飽和度の増すほど良いようである．これら吸収率の他，心穿刺によりえた血漿，肝内脂質を薄層クロマトグラフィーにより分析して，γ-linoleate の脂酸構成へのくみ込みについて検討した成績を報告する予定である．

6. Tc-99m の胃内分泌と胃液との関係および胃スキャニングの試み

日本鋼管病院　○三本　重治　　増岡　忠道
綱島　健一　　山田　二郎
佐藤　靖夫

Tc-99m pertechnetate が胃に集まることは知られているが，静注後の胃液内への分泌については，胃液分泌量との関係は深く，酸度とは関係が少いという W. J. Irivine らの報告と酸度に関係ありとする G. Engelhart らの報告とが現在あるが，われわれはそれを解明する試みとしてランブラン氏法による胃液検査を同時に施行し $^{99m}TcO_4^-$ の胃内への分泌状態について比較検討を行なった．併せて家兎による基礎実験，経時的線スキャニングおよび胃悪性腫瘍，胃潰瘍，その他の胃疾患等の面スキャニングを試みたので，その結果について報告する．

7. ^{131}I 標識ローズベンガルの腎臓からの排泄について

岐阜大学　放射線科　○今枝　孟義　　仙田　宏平
島田　正宏　　西岡　清春

^{131}IRB は肝機能の正常者において静注後急速に肝細胞に摂取され，胆汁と共に十二指腸に排泄される．一方非常にわずかであるが尿中にも 3.3～5.1% ほど排泄され，甲状腺に 1.0～2.7% 取込まれる．^{131}IRB は第一化学製品で遊離 ^{131}I の量が 5% 以下のものを用いた．^{131}IRB は肝臓で ^{131}I と RB とに分離されるので，肝臓に長く停滞すると遊離 ^{131}I の量は増加するといわれ，われわれも肝外性胆道閉塞症，重症肝実質障害に著明な増加を認めた．静注48時間後の甲状腺の取込みは，9% 尿中排泄量は 54.6% で，その大部分を静注24時間に認めた．肝外性胆道閉塞症において ^{131}IRB 静注5日後までスキャンで腎の出現を認め，腎の出現を認めた症例と認めなかった症例との肝機能，特に alk. ph., 直接ビリルビン等に有意の差がみられた．尿中 radioactivity に関しては，Jacobson らの「大部分遊離 ^{131}I である」とは考えにくく，症例によって脾臓の出現をも認めることより体内での ^{131}IRB 分解生成物の存在を考えているが，今後検討を加えたい．

8. ^{131}I Rose-Bengal による肝疾患における肝，胆道機能検査

岡山大学　小坂内科　　湯本　泰弘　　難波　経雄

岡大小坂内科の入院患者で肝疾患患者について ^{131}I Rose-Bengal 2μCi/kg の静注を行ない scintilation camera により経時的に影像を行ないり血中消失曲線，肝臓部の計測を行なってグラフに描せると同時に printout させた．この結果を 3 compartment model で解析する．Scinti camera の所見において急性肝炎，肝硬変では肝臓への取込みが遅れる．肝内胆汁うっ滞の患者では排泄時間の開始の延長と量的減少をみとめるが24時間においてはほぼ全量排泄される．病状の軽快にともなって排泄時間の短縮が起る．肝硬変においては肝循環障害と機能低下のためが肝臓の各部で色素の取込および排泄速度がことなっている現象を認めた．BSP と併用して黄疸患者の鑑別診断およびその限界について報告する．

9. ^{131}I- 標識ローズ・ベンガル肝スキャンによる黄疸の鑑別診断

東京大学　上田内科　　山田　英夫
Unv. Calif. Los Angeles.　D.E. Johnson
G.V. Taplin

黄疸の鑑別診断は時に困難なことがある．^{131}I Rose Bengal 検査，hepatogram は肝機能の指標として価値ある情報を提供したが，黄疸の鑑別診断の点では難点があった．

近年の rapid imaging devices, Anger camera, Dynapix などの発達により，短時間に諸臓器の image がとれるようになり，Rose Bengal 検査も再検討され始め

Presented by Medical*Online